

複数の資料から必要な情報を取り出す力を育てる国語科学習指導の工夫 — スキミングとスキャニングを取り入れた学習活動を通して —

呉市立安登小学校 古城 裕美

研究の要約

本研究は、複数の資料から必要な情報を取り出す力を育てる国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、複数の資料から必要な情報を取り出す力を、複数の資料から自分の収集のために応じた情報を素早く効率的に見付け、取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出す力と定義した。この力を育成するために、第4学年において、概要を素早く把握する読みであるスキミングと、キーワードなどを検索しながら読むスキャニングを取り入れた学習指導を行った。その結果、児童は、スキミング、スキャニングを使い素早く効率的に取り出したい情報を見付け出し、見付けた情報を図に整理することで、情報を頭の中で構造化し活用可能な状態で取り出すことができるようになった。このことから、スキミング、スキャニングを取り入れた学習活動は、複数の資料から必要な情報を取り出す力を育てるに有効であるといえる。

キーワード：スキミング スキャニング 素早く 効率的 活用可能な状態

I 研究題目設定の理由

小学校学習指導要領国語（平成20年）の第3学年及び第4学年「C読むこと」の指導事項に「エ 目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。」¹⁾と示されている。

平成28年度「基礎・基本」定着状況調査において、情報を取り出し、記述する設問（五）の広島県の通過率は29.9%，（六）の通過率は16.3%であった。

（六）については、無答率は28.9%であった。所属校も同様に両設問とも通過率が低かった。また、所属校の調べ学習における児童の実態を見ると、目的を意識せずに漠然と資料を読む、資料を冒頭から細かく読んで時間がかかる、全体を読まずに目に付いた一部分から情報を取り出す、必要な情報を絞り切れず段落をそのまま抜き出すなどの課題がある。これは、複数の資料から必要な情報を取り出す上で、読む目的を意識して読むこと、多量の資料を素早く読むこと、全体を読んで必要な情報がどこにあるか捉えること、必要な情報を絞って取り出すことの指導が不十分であることが原因と考えられる。

そこで本研究では、第4学年の説明的な文章を読むことの学習指導において、複数の資料から必要な情報を取り出す力を付けるために、概要を素早く把

握する読みであるスキミングと、キーワードなどを検索しながら読むスキャニングを取り入れた学習活動を行う。この二つの読みを状況に応じて選択したり、組み合わせたりすることで、複数の資料を素早く効率的に読んで必要な情報を取り出すことができるようになる。複数の資料から必要な情報を取り出す力を育てる上で、この二つの読みを取り入れた学習が有効であると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 複数の資料から必要な情報を取り出す力について

（1）必要な情報を取り出す力とは

情報化社会で生きていく上で、私たちは身の回りに溢れている情報の中から、自分が必要とする情報を見付け出し、それを活用し、問題を解決していくことが求められている。必要な情報を取り出すことについて、河野順子（1996）は、「自分に必要な情報、価値のある情報を取捨選択」²⁾することの必要性を述べている。大熊徹（1999）は情報収集について、「情報をあちこちから単に取り集めるのではなく、集めた情報をよく読みこなし、十分に理解し、自分のものとすることが大事」³⁾であると述べている。情報を

取り出す際には、収集の目的に照らし合わせてその情報が適切なものであるかを評価し、自分の既有知識や経験と情報を結び付けて理解し、自分なりの解釈をもって取り出すことが必要である。書かれていることをただ単にそのまま抜き出すのではなく、そのような取り出しの過程を経ることによって、情報は頭の中で再構成され、活用可能な状態になるのである。

以上のことから、本研究では、「必要な情報を取り出す力」を「自分の収集の目的に応じた情報を取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出す力」とする。

(2) 複数の資料について

教育課程企画特別部会論点整理（平成27年）において、「膨大な情報から何が重要なかを主体的に判断し、自ら問を立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していく」⁴⁾ことが、これから情報化社会では求められていると述べられている。また、情報の取り出しについて、田近淳一（2003）は、「複数資料を用意することが、情報の受容を幅広いものにすると同時に、それ自体を確かなものにすることができる。」⁵⁾と述べている。情報化社会で直面する課題を解決し、新たな価値を生み出すために活用しなければならない情報は膨大な量である。また、情報を幅広く受容し、確かな理解を行うためには複数の資料で学習することが有効である。

以上、情報化社会という社会の状況や幅広く確かに情報を取り出す力を育てる必要性から、情報を取り出す力の育成において、複数の資料を準備することが必要であるといえる。

(3) 複数の資料から必要な情報を取り出す力とは

(2) で述べたように、複数の資料から必要な情報を取り出す力を育てることは、児童がこれからの社会を生きていく上で欠かせない。しかし、扱う資料が増えれば、その分情報を効率的に素早く見付ける力が必要となる。効率的に素早く情報を探し出すには、初めから順を追っていくような読みではなく、資料を概観し目的に応じた情報がどこに書かれているか焦点を絞って情報を探し出す方法を学ぶ必要が

ある。小学校学習指導要領解説国語編（平成20年）の中にも、「効果的な読み方」に関わって、「本や文章全体を概観しながら拾い読みする摘読」⁶⁾の活用について述べられている。

以上、(1) (2)を踏まえ、本研究では、「複数の資料から必要な情報を取り出す力」を「複数の資料から自分の収集の目的に応じた情報を素早く効率的に見付け、取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出す力」と定義する。

2 スキミングとスキャニングを取り入れた学習活動について

(1) スキミングとスキャニングについて

スキミング・スキャニングとは、もともと英文読解に用いられる読解方法であり、効率的に必要な情報を探し出すために用いられる。小西正恵（2005）と天満美智子（1989）が述べているスキミングとスキャニングを整理し、表1に示す。スキミングもスキャニングも目的とする情報を素早く探すために、文章の詳細にはとらわれず選択的に読んでいく方法であることが分かる⁽¹⁾⁽²⁾。

小西、天満ともスキミングを、「文章の詳細にとらわれず、概要を把握するための読み」、スキャニングを「特定の情報（語句や単語など）を探しめる読み」としている。スキミングでは、意味段落ごとに分からぬ語句は読み飛ばし、中心となるセンテンスをおさえながら、その概要を把握していく。一方、スキャニングでは、取り出そうとする情報に関係する言葉に注目して情報を探し出していく。

以上のことから、本研究で扱うスキミングを「文章の詳細にとらわれずに、概要を把握する読み」、スキャニングを「取り出そうとする情報に関わる言葉に注目し、目的に応じた情報を探し出す読み」と定義する。

また、先述の概観しながら拾い読みする摘読の仕方を具体化する方法として、概要を把握するスキミング、特定の言葉に着目して情報を探し出すスキャニングを取り入れることは、有効であると考えられる。

表1 小西と天満のスキミング、スキャニングの整理

	小西	天満
スキミング	選択的な読みで、無視したりほとんど注意を向かない部分があるなど、文章の詳細にはとらわれず、概要を把握する読み。	テキスト全体にさっと目を走らせ、大づかみに大意をとる読み。
スキャニング	特定の目的を達成するための選択的な読み。求める情報に関係ない部分は切り捨てられる。単語や語句などを探しめる読み。	特定の情報だけにねらいをつけて、それを素早く探し求める読み。

(2) スキミングとスキャニングを取り入れた情報の取り出しの過程

そこで、本研究では、複数の資料から必要な情報を取り出す過程を図1のとおり提案する。取り出しの過程を大きく二段階に分ける。前半では、スキミングとスキャニングによって注目すべき資料の部分を焦点化し素早く効率的に情報を探し出し、後半では、これまで身に付けた精読の力を使って情報を取り出す。スキミング、スキャニングは児童自身が必要に応じて選択したり、組み合わせたりして使っていく。また、二段階の情報評価を位置付け、目的に応じた情報を取り出すことができたかを確かめる活動を取り入れる。スキミング、スキャニングは単独で取り入れるのではなく、このような情報の取り出しの過程の中に位置付けた上で単元に取り入れることで有効に機能する。

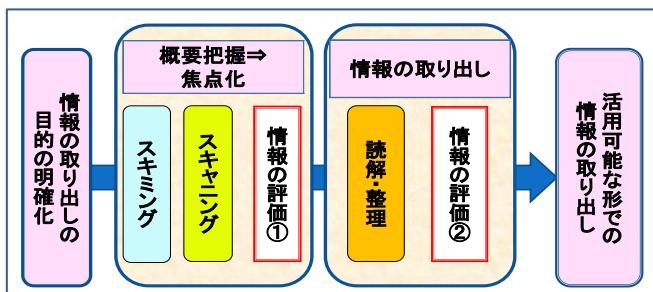


図1 スキミング、スキャニングを取り入れた情報の取り出しの過程（例：組み合わせた場合）

(3) スキミングとスキャニングを取り入れた学習活動の工夫

スキミング、スキャニングを実生活で使えるようにするために、転移を促す学習活動の工夫が必要になる。また、卯城祐司（2013）が述べている読解においてのスキーマの活性化の重要性⁽³⁾から考えると、内容に関わるスキーマを活性化させる学習活動の工夫も必要であるといえる。以下、それらの工夫について述べる。

ア スキミング、スキャニングを実生活で使えるようにするための学習活動の工夫

森敏昭ら（2011）は転移を高める学習指導法として、メタ認知させることや複数の文脈を用いることの有効性を指摘している⁽⁴⁾。この指摘を踏まえ、本研究では、次の三つの転移を図る工夫を行う。

(ア) 方略使用過程のモニタリングと取り出した情報の評価による読みの過程の自己評価

自分の読みを評価し、修正していくことができるようになるためには、様々な段階での自分の読みに

ついてのモニタリングや評価が必要になってくる。そこで、本研究では、スキミング、スキャニングを具体的な場面でどのように使用して、目的に応じた情報を探し出すことができたか、自分の方略使用過程を振り返る時間をもつ。

また、取り出した情報の評価を①取り出す情報を焦点化した段階、②取り出した情報を図に整理した段階の二段階で行う。一つ目の評価では、焦点化した資料の部分が目的に応じた情報であるかを評価していく。二つ目の評価では、児童は、取り出した情報が目的に応じているか評価するとともに、取り出した情報の取捨選択や追加すべき情報について判断していく。その中で児童は、自分の読みの過程を自己評価し、目的を達成できていない場合は、自分の読みを修正していく。このようなメタ認知を促す学習活動を組み入れることによって、児童はスキミング、スキャニングを実生活で活用できる方略として身に付けていく。

(イ) 読解方略のメタ認知を促進する学習過程

読解方略のメタ認知を促進するためには、メタ認知能力を高めるような教授法を用いることが重要である。読解指導で用いられる相互教授法では、児童が、方略使用時のメタ認知過程を他者との関わりの中で体験していくことで実感を伴った理解を得るために、モーデリング、足場づくり、相互学習という学習過程がとられる。河野（2006）も、メタ認知の内面化モデルを提示し、他者との関わりによってメタ認知的活動が活性化し、メタ認知的知識の育成が行われることを述べている⁽⁵⁾。つまり、教師がモデル教材で示した読解方略を子供が他者と関わりながら具体的な文脈の中で実際に使ってみて、読解方略の使用の仕方を確かめたり、見直したりすることが必要なのである。

以上のことから、本研究ではスキミング、スキャニングの仕方を、①モデル教材を使ってのモーデリング、②グループでの方略使用体験、③個人で方略を使用して焦点化させた情報を交流するという学習過程で学習させていく。

(ウ) 複数の文脈での学習

転移を図るために、先述のように複数の文脈で用いることが必要である。そこで、本研究では連続型テキストである説明的文章でスキミング、スキャニングする学習活動と、非連続型テキストが多く含まれる事典でスキミング、スキャニングする学習活動の二つの学習活動を取り入れ、実生活でも使える方略として定着させる。

イ スキーマの活性化を図る工夫

読み手が、読む内容に関わる内容スキーマをどれだけもっているかは、読解において重要な要素となる。古賀洋一（2013）は、内容スキーマの重要性について、文章に対する内容スキーマの所有が、意味の分からぬ語句や文を前後の文脈を手掛かりとして意味を推測し、おおよその内容を理解することに役立つことを示唆している⁽⁶⁾。スキミング、スキャニングを行う際にも、ある程度の内容スキーマを所有させておく必要がある。内容スキーマによって、初読の文章においても内容をイメージすることができ、特にスキミングによる概要把握が容易になる。ところが、小学校中学年段階では、テーマに関する内容スキーマを所有していないことが考えられる。そこで本研究では、テーマに関する内容スキーマを獲得させる簡単な副教材、視聴覚資料などと、主教材を組み合わせて内容スキーマの活性化を図り、スキミング、スキャニングを行わせる。

（4）スキミングとスキャニングを取り入れた単元構成

本研究では、（2）（3）を踏まえ、スキミングとスキャニングを取り入れた情報の取り出し過程を位置付けた単元を以下のように五つの段階を組み合わせて設定する。この単元構想図を図2に示す。

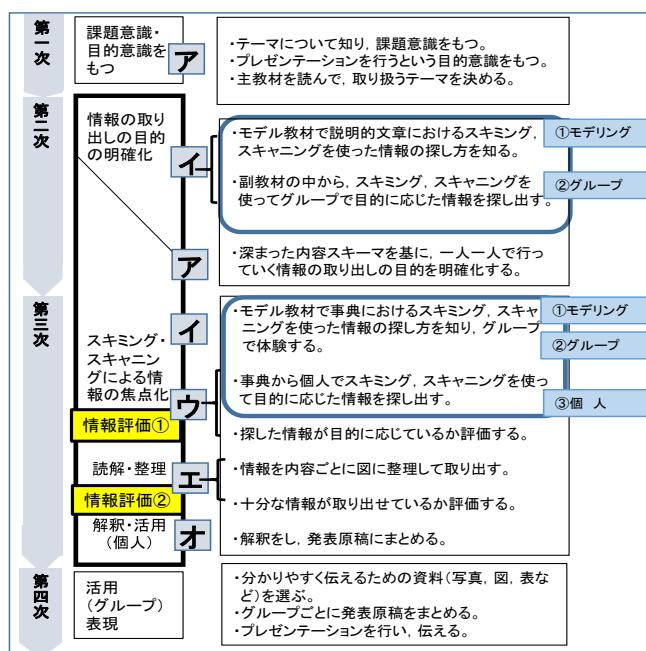


図2 単元構想図（例）説明的文章と事典を扱う場合

ア 目的を分析し、必要な情報を把握する段階

この段階は、自分が取り組んでいこうとするテーマにおいて、どのような情報を調べていく必要があ

るのか明確にする段階である。まず、テーマについての視聴覚教材を視聴させ、内容スキーマと課題意識をもたせる。そして、単元のゴールのイメージを具体的に示して、学習の見通しと意欲をもたせる。次に、主教材を読ませることで、自分が調べるテーマを決定させる。そして、さらに内容が具体化した副教材を目的をもって読ませることで、目的に応じた情報を取り出せるとともに、調べていくテーマに対する内容スキーマを活性化させて、訴えたい事を伝えるために、どんな情報が必要になるかを分析させ、情報の取り出しの目的を明確にさせていく。

イ スキミング、スキャニングの仕方を身に付ける段階

この段階は、スキミングとスキャニングの仕方を①モデリング、②グループでの方略使用体験によって学んでいく段階である。モデリングの段階では、モデル教材を使い、スキミング、スキャニングを具体的にどこでどのように行うのかというモデルを示していく。グループで体験する段階では、グループで共通の教材を使い、スキミング、スキャニングを使って情報を探し出す過程を体験することで、スキミング、スキャニングの仕方を具体場面で確かめさせ、実感を伴った理解をさせていく。また、各段階において、スキミング、スキャニングの過程を振り返らせる。

本単元では、説明的文章と事典を扱っていく。説明的文章では、スキミングをする際に、意味段落ごとに概要を把握する方法を実際の文章の中で児童と共に確認していく。事典では、目次や各ページの見出しを使ってスキミングをさせていく。スキャニングについては、取り出そうとする情報に関わる言葉に注目しながら、探し出させていく。

ウ スキミング、スキャニングを使い必要な情報を焦点化する段階

個人で必要な情報の焦点化を行い、その情報を評価することでその方略使用に習熟していく段階である。情報を焦点化させた後、グループで評価し合う活動（情報評価①）を行わせる。（前掲図1の概要把握→焦点化の過程）

エ 情報を整理するために詳しく読む段階

情報を活用可能な状態で取り出す段階である。見付けた情報を内容を構成しているキーワード・キーセンテンスで抜き出し、図に整理させていく。そして、内容ごとに見出しを付けたり、キーワード同士の関係を考え、線や矢印でつなげたりさせていくことで、情報の関係を整理し、構造化して捉えさせる

ようとする。その後、図を示しながら説明し合うことで、情報を評価し合う活動（情報評価②）を行わせる。（前掲図1の情報の取り出しの過程）

才 必要な情報を基に自分の考えをまとめる段階

取り出した情報を解釈し、活用していく段階である。取り出した情報について、自分なりに解釈して情報同士の関係に基づいて構成を考え、まとめていく。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

情報の取り出しの過程にスキミング、スキヤニングを位置付けた学習活動を行えば、複数の資料から必要な情報を取り出す力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点	方法
複数の資料から自分の収集の目的に応じた情報を素早く効率的に見付け、取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出す力と意識が高まったか。	事前テスト 事後テスト 事前アンケート 事後アンケート 児童のワークシートの分析
スキミング、スキヤニングを取り入れた学習活動は、複数の資料から自分の収集の目的に応じた情報を素早く効率的に見付け、取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出す力を育てるために有効であったか。	

IV 研究授業について

次の通り、研究授業の内容と計画を示す。

研究授業の内容と計画

期間	平成28年12月1日～平成28年12月9日
対象	所属校第4学年（19人）
単元名	伝えよう！環境問題 ～自分が伝えたい環境問題について調べ、プレゼンテーションしよう～
目標	目的や必要に応じて、文章の全体を概観しながら拾い読みをしたり、要約するために細かい点に注意しながら読んだりして、目的に応じた情報を取り出すことができる。
指導計画（全12時間）	
次時	主な学習活動
一 1	視聴覚教材を視聴し、環境問題について関心をもつ。
一 2	学習の見通しをもつとともに、主教材を読んでグループで取り組む環境問題のテーマを決める。

二	3	モデル教材を使って、スキミング、スキヤニングの仕方を身に付ける。
	4	スキミングとスキヤニングを使って、副教材から目的に応じた情報を取り出すとともに、自分たちが調べていきたい環境問題について、訴える事とそのために必要な情報を明確にする。
三	5	事典を使って、スキミング、スキヤニングの仕方を身に付ける。
	6	事典から、スキミング、スキヤニングを使って情報を取り出し、その情報を評価する。
	7	取り出した情報を図に整理する。
	8	情報を評価し合い、不足していた情報をスキミング、スキヤニングを使って取り出す。
四	9	自分の調べたことについて構成を考え、発表原稿を書く。
	10	分かりやすく伝えるための資料（図や写真など）を選び、グループで発表原稿を仕上げる。
	11	プレゼン発表会をし、5、6年生の感想から自分たちの学習過程を振り返る。
	12	

V 研究授業の分析と考察

1 複数の資料から必要な情報を取り出す力と意識が高まったか

（1）事前テスト・事後テストの分析

事前テスト・事後テストは、意見文の前後の文脈から必要な情報を焦点化し、複数の資料からその情報を素早く効果的に取り出せるかを検証する問題を作成した。設問は二つあり、一つ目は1文で、二つ目は2文で、それぞれ意見文の文脈に合うように書き換えて答えるものである。

ア 複数の資料から自分の収集の目的に応じた情報を取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出すことができたか

事前・事後のテスト結果を図3に示す。

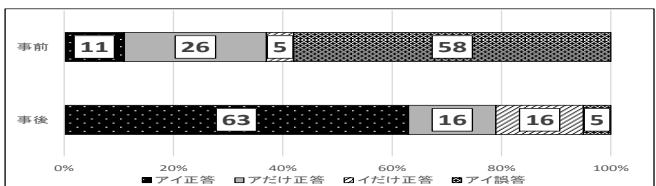


図3 事前テストと事後テストの結果

これによると、両設問が正答であった児童は11%から63%に増えている。逆に、両設問が誤答であった児童は58%から5%に減っている。事前では、段落ごと抜き出し文脈に合わない回答も目立っていたが、事後では、複数箇所から目的に応じた情報を取り集め、文脈に合うように整理して書けていた。これは、児童が目的に合う情報を取捨選択し、そこに書かれていることを解釈したことにより情報が活用可能な状態で取り出せたことを示している。このことから、複数の資料から自分の収集の目的に応じた情報を取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取

り出す力が高まったといえる。5%に当たる両設問が誤答であった一人の児童は、集中力に欠けテスト中もほかのことに気をとられてしまっていた。

イ 素早く効率的に取り出すことができたか

事後テストでは、19人中18人の児童の正答数が増えた。その18人の回答時間の変化を表3に示す。

表3 正答数が増えた児童の回答時間の変化

縮まった時間 (分)	1 2	2 3	3 4	4 5	5 6	6 7	7 8	8 9
人数(人)	2	0	4	5	3	3	0	1

これを見ると、どの児童も回答時間が縮まっており、平均するとおよそ4.7分回答時間が縮まっている。事前テストでは、10分以内で両設問を正答できた児童はいなかったが、事後テストでは、12人の児童が10分以内で正答することができている。このことから、児童は必要な情報を素早く取り出すことができるようになったといえる。

また、児童が情報を取り出す際に着目した部分を分析した結果を図4に示す。

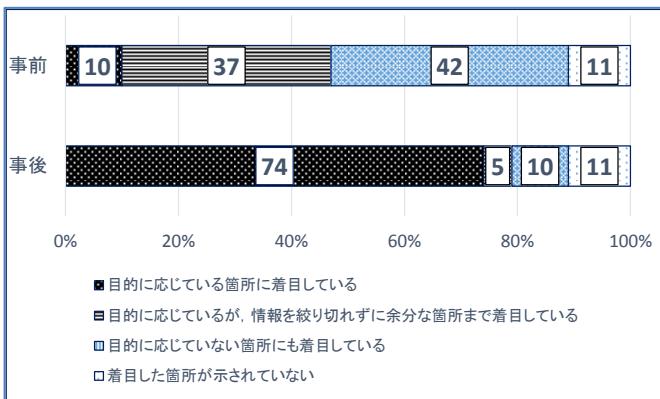


図4 情報を取り出す際に、着目した箇所

これを見ると、事前テストでは、目的に応じていない箇所にも着目していたり(42%)、目的に応じていても、必要な箇所を絞り切れずに余分な箇所にまで着目していたり(37%)することが目立っている。それに対して、事後テストでは、正しい箇所に着目して正しい情報を取り出すことができる児童が増えている。(10%→74%) これは、スキミング、スキャニングの学習を通して、目的を意識して情報を探し出す意識が高まり、不必要な箇所には着目せずに、必要な箇所に焦点を絞って探すことができる

ようになったことを示している。つまり、効率的に情報を見付ける力が高まったといえる。

のことから、素早く効率的に必要な情報を見付ける力にも高まりが見られたといえる。

(2) 事前・事後のアンケートの分析

この力の高まりは意識の変容にも表れている。図5は、資料から必要な内容をすぐに見付けるについての意識の変容を示したものである。

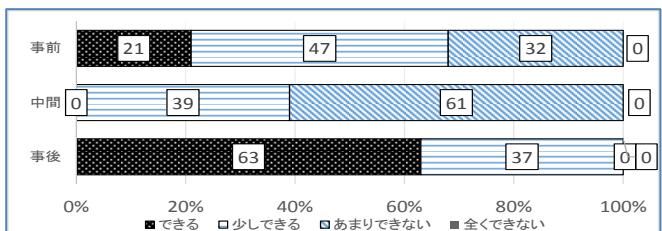


図5 「資料から必要な内容をすぐに見付けること」についての児童の意識の変容

スキミング、スキャニングを使って情報を取り出す学習をする前は、68%の児童が「資料から必要な内容をすぐに見付けることができる」と肯定的に答えていた。これは、質問の「すぐに見付ける」という言葉の捉えが曖昧であったためと考えられる。スキミング、スキャニングの学習に入ってから、改めて以前の自分は必要な内容をすぐに見付けることができていたかを聞いてみると、肯定的な評価をした児童は39%に減った。スキミング、スキャニングの学習により、自分の探し方は素早い方法ではなかったことに気付いたためと考えられる。しかし、事後アンケートでは、全児童が「すぐに見付けることができる」と肯定的に答えており、素早く効率的に必要な情報を見付けることについての意識の高まりが見られる。

以上のことより、複数の資料から自分の収集の目的に応じた情報を素早く効率的に見付け、取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出す力と意識が高まったといえる。

2 スキミング、スキャニングを取り入れた学習活動は有効であったか

(1) 児童のワークシートと振り返りの分析

児童のワークシートと振り返りから学習活動の有効性について検証する。事前テスト全誤答から事後テスト全正答に向上した児童A・B、及び、他の児童のスキミング、スキャニング及び情報の取り出しの思考の状況を次頁図6に示す。

	児童Aの記述や思考	児童Bの記述や思考	他の児童のメタ認知に関わる記述・発言
説明的文章でのスキミング・スキャニング（第二次）	<p>モデル教材でのモデリング</p> <p>副教材</p> <p>取り出したい情報に関するキーワードに着目し、情報を焦点化できている。</p> <p>ぼくは、取り出したい情報を素早く探しるために、スキミングをして関係のない所を読み飛ばし、スキャニングして、素早く探し出せた。</p>	<p>副教材から自分が取り出したい情報を探し出す。</p> <p>モデル教材</p> <p>繰り返し出てくる言葉に丸をつけ、キーセンテンスに波線を引きながら、概要を把握し、メモに残している。 (スキミングの学習)</p>	<ul style="list-style-type: none"> スキミングをすると、どこに取り出したい情報があるか見当を付けて探すことができる。 キーワードに着目してスキャニングするとすぐに見付けられた。 <p>スキミング・スキャニングの有効性に対する気付き</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章が長くて、取り出したい情報がいくつかの段落の中にありそうだったので、スキミングをしてまず、どこにどんなことが書いてあるか把握してから、スキャニングした。 スキャニングしただけでも、取り出したい情報が探し出せた。
事典でのスキミング・スキャニング（第三次）	<p>目的的明確化</p> <p>環境問題の中からプレゼンテーションで訴えたい事（目的）とそのために必要な情報を明確にする。</p>	<p>モデル教材でのモデリング</p> <p>事典から自分が取り出したい情報を探し出す。（グループ⇒個人）</p> <p>取り出したい情報 【どんな野生動物が絶滅の危機に立たされているのか】 探し出した情報の例：ジャイアントパンダ 着目したキーワード 【絶滅、数が減っている】</p>	<p>スキミング・スキャニングに関わる方略使用過程の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> 取り出したい情報に関するキーワードに着目し、目次や見出しを見てスキミングをして、おおまかに書かれていることを素早くつかむことができた。 まずスキミングをして、関係のない所だと思ったら、すぐに別の所を読みました。 <p>説明的文章での学習の活用に関する記述</p>
情報の取り出し（第三次）	<p>情報評価①</p> <p>児童Aの図の一部</p> <p>見出しを付ける。</p> <p>必要なキーワード、キーセンテンス同士の関係を考えながら、矢印などでつなぎ内容を整理できている。</p>	<p>情報評価①</p> <p>児童Bの図の一部</p> <p>探し出した情報の概要を説明し合うことで、取り出したかった情報に合っているか確認し合っていた。</p> <p>図に整理する時に、ぼくは、キーワードのつながりを考えるために、何回も資料を読み直した。情報を図に整理すると、より深く理解できた。</p> <p>情報評価②</p> <p>情報評価し合い、付け加えるべき情報を付箋にメモをし、追加して調べていた。</p> <p>図を基に発表原稿を書く。</p>	<p>説明的文章での学習の活用に関する記述</p> <ul style="list-style-type: none"> 今までの書き写すだけの取り出し方と比べて、図に整理した方が簡単にまとめられていいくと思った。また、図に表すことで、相手に伝えやすいという所も良い所だと思った。 図にする前に理解できていなかった所が、図にすると頭の中で整理して理解できた。 <p>図に整理することの有効性に対する気付き</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分で良いと思っていても、確認してみると、伝えたい事が少しずれていたし、内容が不十分であることに気付いた。 友だちに説明してみて、意味が難しくて伝わらない言葉があったので、説明を加えたら分かりやすくなった。 <p>情報評価の必要性に対する気付き</p>

図6 スキミング、スキャニング及び情報の取り出しの思考の状況

これによると、説明的文章と事典を使ってのスキミング、スキャニングの学習を通して、児童はスキミング、スキャニングの仕方を身に付けるとともにその有効性に気付くことができたことが分かる。また、取り出したい情報を明確にし、二段階の情報評価を単元に位置付けたことによって、児童は自分の取り出した情報が目的に応じたものであるのか確かめる方法や必要性を学ぶことができた。それは、事後テストにおける取り出した情報を自ら評価する児童の姿にも表れていた。情報を取り出す段階では、見付けた情報を図に整理することにより、自分の頭の中で情報を再構成し、深く理解することができると気付いていた。また、図に整理したことにより、児童にとって情報が活用可能な状態となり、発表原稿にまとめる際にも、その図を見ながら比較的容易に自分の言葉で文章を書くことができていた。さらに、児童A、B共に、目的に応じた情報を効率的に素早く取り出せるようになっただけでなく、資料から必要な情報を取り出す学習に対する意欲が大きく高まった。

(2) 事後のアンケートの分析

事前・事後テストに関わって、情報の探し方が変わったかどうかを聞いたアンケートによると、次の記述のように全児童が変わったと返答している。

- ・初めのテストでは、文章を全部読んでいたけれど、最後のテストでは、スキミング、スキャニングをして取り出したい情報がどこにあるか見当を付けながら探すようになった。
- ・関係するキーワードを探して、大まかに読んでいくことで素早く探せるようになった。
- ・スキミング、スキャニングを使って文章の内容を素早く、簡単にとらえ、必要な情報が探せるようになった。

情報の探し方に関する児童の記述

学習前は、資料を冒頭からすべて読み必要な情報を見付けるのに時間がかかっていた実態が、スキミング、スキャニングを取り入れた学習によって、概要を把握して必要な情報のありかを焦点化して探したり、取り出したい情報に関するキーワードに着目して探したりすることができるようにならったことが分かる。また、そのことにより必要な情報を素早く効率的に探し出すことができるようになり、探し出すことそのものも簡単になったという意識の変容も見られる。

この情報の探し方の意識の変容は、スキミング、スキャニングの有効性を問うアンケートにも反映している。アンケートによると、素早く効率的に情報

を探し出すために、スキミング、スキャニングが有効であったと全児童が答えている。

以上の結果から、スキミング、スキャニングを取り入れた学習活動は、複数の資料から自分の収集の目的に応じた情報を素早く効率的に見付け、取捨選択し、解釈をして活用可能な状態で取り出す力を育てるために有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

スキミング、スキャニングを取り入れた学習活動は、複数の資料から必要な情報を取り出す力を育てるために有効であった。

2 今後の課題

スキミング、スキャニングを使って情報を素早く効率的に探し出すことは、情報を収集し、活用する学習以外でも有効であると考えられる。今後、国語科のほかの単元や他教科の学習において、スキミング、スキャニングの活用の仕方について追究し、単元づくりを行っていく。

【注】

- 1) 小西正恵 (2005) : 「ストラテジー」『英文読解のプロセス指導』大修館書店pp. 219-220に詳しい。
- 2) 天満美智子 (1989) : 『英文読解のストラテジー』大修館書店p. 98に詳しい。
- 3) 卵城祐司 (2013) : 『英語リーディングの科学』研究社 p. 50に詳しい。
- 4) 森敏昭・岡直樹・中條和光 (2011) : 『学習心理学理論と実践の統合をめざして』培風館pp. 174-176に詳しい。
- 5) 河野順子 (2006) : 『<対話>による説明的文章の学習指導』風間書房p. 95に詳しい。
- 6) 古賀洋一 (2013) : 『説明的文章の読解方略指導の検討－条件的知識の観点から－』広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第62号p. 163に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省 (平成20年) : 『小学校学習指導要領』p. 23
- 2) 河野順子 (1996) : 『対話による説明的文章セット教材の学習指導』明治図書p. 39
- 3) 大熊徹 (1999) : 「序論情報教育と国語科授業の構想」『情報教育と国語科授業の構想と展開』明治図書p. 11
- 4) 中央教育審議会 (平成27年) : 『教育課程企画特別部会論点整理』p. 2
- 5) 田近淳一 (2003) : 『情報と論理を追求する説明文の授業』国土社p. 19
- 6) 文部科学省 (平成20年) : 『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版p. 88